

歴博をあるく

歴博に見る豪族・武家の館

広報部会

佐倉城や本佐倉城にあるように、濠、土塁、櫓はお城の構成として常識のように思えるが、城の前身としての武家の館もそうであったのか。今回は、歴博総合展示場の3つの武家の館を歩きその様相を探検した。

第1室 東国の豪族居館(三ツ寺I遺跡)



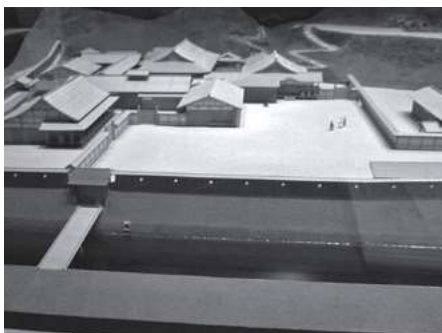
三ツ寺I遺跡は、群馬県に所在した5世紀後半～6世紀初頭の豪族の館である。上越新幹線の建設に伴う発掘調査によって発見された。発掘が行われたのは主に館の西半分なので、その東部分は推定した模型であるそうだ。規模は一辺約86mで、周囲は幅約30m、深さ3.5mの濠で囲み、館の内側斜面に4カ所の張り出しがある。内側斜面に敵が迫ったとき、この張り出しから矢を放ったりして館を守る工夫がしてあるという。

第2室 武士の館



東国の武士の館については、足利氏の館跡(栃木県足利市)、加治氏の中山館(埼玉県飯能市)など各地に多数の遺構が残っている。この模型は、地形・立地を主として鎌倉時代の中山館に範をとり、建物については絵巻物を参考とし、発掘の成果等も勘案して製作した小規模の武士の館である。南北約75m、東西約60mの長方形で、外側に2～5mの濠をめぐらし、内側には土塁を築く。濠に架けられた木橋を渡ると櫓門があり、上には敵の来襲に備えて弓矢や楯が置かれるそうだ。

第2室 朝倉氏本館



戦国大名・朝倉隆景から5代103年にわたり越前を支配した朝倉氏。5代目当主の義景は浅生氏と同盟を組み織田・徳川軍と激突、破れて義景は自害。朝倉家繁栄の幕を閉じた。昭和42年から始まった福井県一乗谷の発掘調査の結果、朝倉氏本館は約5,600㎡の面積を持ち、館内最大の建物である常盤殿と2番目の大きさを持つ主殿を中心に、16棟の建物が検出された。当復元模型で見ると、土塁は見当たらないが、板塀が周りを囲み、その外にめぐらせた濠とともに外敵からの防御としている。

武家の居館はいずれも敵からの攻撃に備えている。橋を閉鎖すれば、濠からしか侵入できない。まだ、この時代鉄砲は普及していないと思われるが、深い濠を移動しているときに弓矢で狙われたら逃げるすべはないように思える。後世の戦国大名の城に繋がる、濠・土塁(塀)、櫓はこの時代から始まっていた。